

日航機墜落事故41年

安全な社会へ 歩み続ける

乗客乗員520人が犠牲となった日航ジャンボ機墜落事故は12日、発生から41年を迎えた。群馬県上野村の墜落現場「御巣鷹の尾根」には、女川町で勤務中だった銀行員の田村健太さん(当時25)を東日本大震災の津波で失った両親が、他の防災遺族らと足を運んだ。熊本地震後の爆発事故で亡くなった人への思いも胸に、企業管理下における安全な社会を目指して歩み続けることを誓った。

女川・震災遺族ら 慰霊登山

「従業員の命守って」

健太さんは震災当時、七

十七銀行女川支店に勤務していた。上司の指示で支店屋上に避難し、津波の犠牲になった。父孝行さん(65)と母弘美さん(63)は、企業防災を訴える活動を始め、日航機事故や防災の遺族と出会った。

尾根への慰霊登山には、2015年から参加する。夫妻の元にはこの日、思いを共にする防災遺族や大学生ら約20人が集まった。一行は冷たい雨が降る中、ぬかるんだ登山道を一步一步進んだ。

夫妻は毎年、事故機に1人で乗っていた美谷島健君(当時9)の発見現場にある墓標の前で手を合わせる。野球が大好きだった健君のため、高校野球で捕手として活躍した健太さんの練習球を今年も供え

た。練習球には「安全な社会に向かって継続 健ちゃん 健太との約束」と書き添えた。弘美さんは「今年も来たからね」とつぶやき、墓標を優しくなでた。今年で11回目の登山となった孝行さんは「供えたボールも来年で1ダースになる」と



健君の墓標の前で手を合わせる孝行さん(右)と弘美さん

感慨深そうに語った。

近年は「安全の聖地」として尾根を目指す他の事故や災害の遺族も多い。一方で、7月の熊本地震では、イオンモール熊本で爆発が起き、テナント従業員7人が犠牲になった。上司の指示で施設内に戻り、爆発に巻き込まれた人もいた。

「あつてはならないことだ」。そう憤ったのは、田村夫妻とともに登った高橋幸美さん(63)。広告大手電通の新入社員だった長女まつりさん(当時24)を過労自殺で失った。「従業員の命を守らないなんて許されない。今回の事故で全国の企業は思い知ったはずだ」と語気を強めた。

事故遺族らでつくる「8・12連絡会」の事務局長で健君の母邦子さん(79)も「事故から41年がたっても社会が変わらない」と嘆息した。「日航機事故の遺族だけでは安全はつくりえない。多くの遺族の力を借りて、一人一人の命を大切にする社会をつくっていきたい」と力を込めた。

孝行さんは「従業員の命を守らなければいけないという考えがまだまだ浸透していないとはっきり分かった。企業の関心を高め、防災の在り方が変わっていくよう、遺族同士の連携も力にして愚直に活動が続けていく」と前を向いた。

(漢人薫平)



願いを記した垂れ幕を尾根で掲げ、連帯を強めた遺族ら